

新宿折をり

NO. 43

- 国公立出願状況
- リアルセンターの見方
- キャリアガイダンス報告

「好き」という才能

保健体育科 津川 菜由子

最近、生徒の皆さんから「先生はどうして先生になったのですか」という質問を受けることが多くなりました。自分の進路選択について悩んでいる人が多いのかもしれませんが、皆さんに対して完璧な助言ができるほどの人生経験を積んできているわけではありませんので、将来について悩んでいる人に少しでも今後のヒントとなってくれたらいいなと思って、今この文章を書いています。

皆さん、突然ですが「好き」だといえることはありますか？

何が頭に浮かんだでしょうか。私の、先ほどの質問に対する答えはズバリ「学校が好きだったから」です。さらに言うと、「体育の授業が好きだったから」でもあります。なんだそんな理由か、と思われるかもしれませんが、ただ私は、この進路を選択したことに自信と誇りを感じています。

私が進路選択を考え始めた頃の話をしてします。私は、宮城県の仙台市にある公立高校に通っていました。1904年に設立された、歴史のある元女子高です。私が入学した年度より中高一貫・男女共学となり校名や制服が変わりましたが、新宿高校のように伝統を重んじる学校でした。共学の一期生でしたので、入学した240名のうち男子は16名。私のクラスは40人中40人が女子といういわゆる「女(ジョ)クラ(女子クラス)」でした。大好きな担任の先生(担当科目は倫理)と、勉学や部活動をはじめ、学校生活にまじめに熱心に取り組むクラスメイトたちに囲まれ、毎日が楽しく、学校が大好きでした。おそらくはじめは「大人になっても学校にい続けられるなんて、さらに体育の授業をし続けられるなんて最高じゃ〜ん」くらいの感情だったかもしれませんが、先ほども述べた通りたまたま「学校が好き」であったために教育関係の道に進もうと考えました。(もちろん小中高とずっと学校が大好きだったわけではありません。小学校の時は一時期学校にいけない時期もありました。)

私は、このようにそれぞれ頭の中に浮かぶ「好き」なことは、その人にしかない、他の人には絶対に真似できない「才能」だと考えています。その好きなことを今私は仕事にできているので、今のところこの進路選択に後悔はしていません。

一番初めの質問に戻りますが、皆さんが「好き」なことは何でしょうか？本を読むのが好きな人、運動することが好きな人、人と接することが好きな人、一人で黙々と作業をすることが好きな人、文系科目が好きな人、理系科目が好きな人、実技科目が好きな人、、、様々だと思います。今進路について悩みがある人は、ぜひその好きなことが頭に浮かんだことに自信と誇りを感じてください。今後の進路選択の材料にするのも一つの手かもしれません。

最後に私の話をすると、私自身にこれから求められることはその選んだ道でどう生きていくか、だと思います。その際この先たくさん、人生における大きな選択が待ち受けていると思っています。そんなときも、自分の中にしかない「好き」という才能を自信にしていきたいです。

□ 3年生国公立出願状況

受験年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
	66回生	67回生	68回生	69回生	70回生	71回生
5教科7(8)科目受験者	155	162	182	171	179	190
国公立大出願者(前期)	180	193	214	213	195	216
国公立大等合格者	81	87	101	95	79	

センター試験の結果を受けて、2次の出願が終わりました。新宿高校では、国公立大出願者が昨年よりも21名増え216名となりました。また、国公立大受験に基本的に必要となるセンター試験を5教科7(8)科目で受験した生徒数も表のとおり190名となり、初めて学年全体の6割に達しました。2次試験は2月25日に始まります。3年生の健闘を祈っています。

□ 2年生は3年0学期のスタート

受験学年としての3年0学期はすでにスタートしています。来年のセンター試験までもう一年ありません。焦る必要はありませんが、「受験はまだ先のことだ。」と先送りする余裕もありません。

○ 目標を定める

目標を定め、その実現化のための計画を立て、それを日々実行することが大切です。予定通りに進まない時は立ち止まって計画を修正することも必要ですが、それでも構いません。目標実現のための「計画」と「実行」を始めてください。「計画」は「自分との約束」とも言えるでしょう。

○ 受験勉強は貴重な経験

受験勉強というと、何か暗くて辛いというイメージが付きまといますが、それは世間が勝手に作り上げた幻想。人は生来的に学ぶことが好きな生き物です。皆さんも学ぶことの楽しさはこれまでに何度も味わっているはず。その意味では、大学受験のように勉強に没頭できる機会は、人生における至福の時かもしれません。思いっきり勉強して今後の人生につなげていきましょう。

○ バランスのとれた学力を

ただ、受験勉強という特別な勉強があるのではありません。受験では高等学校の授業で学ぶすべてのことが試されます。教科や科目という仕切りはありますが、例えば「現代文」や「英語の長文読解」の入試問題にはあらゆる教科・科目の内容が取り上げられています。

また、学力だけでは不十分です。まる二日間に亘るセンター試験では体力と集中力がないと話になりません。体育や部活で鍛えた体力と精神力がぜひとも必要なわけです。受験生である前に高校生であることを肝に銘じておきましょう。

○ リアルセンターの見方

2年生は全員がリアルセンターを受験しました。

結果はそれぞれだったと思いますが、皆さんはまだまだ伸びます。

現3年生が、2年生の時に受けた英語のリアルセンターの新宿高校平均点は132.4点、その時の全国平均点は123.8点。今年、3年生として受けたセンター試験の新宿高校平均点は167.9点、全国平均点は125.5点で一年後のセンター本番では、全国平均点を40点以上上回っています。数学は全国平均点に全く届いていなかったのにIA

(新宿高校平均点53.8点、全国平均点61.9点)もII B(新宿平均点39.0点、全国平均点51.1点)も大きく伸ばし、3年生として受けたセンター試験の新宿高校平均点はIA74.2点、全国平均点は61.5点、II B新宿高校平均点68.

5点、全国平均点56.3点と大きく伸ばしています。国語は2年の時すでに受験生の全国平均点を上回っていましたが(新宿高校平均点108.1点、全国平均点104.7点)、そこからさらに45点積

み上げています(新宿高校平均点153.8点、全国平均点117.8点)。先輩たちの伸びを参考にし、1年後の自分をイメージしましょう。皆さんはまだまだ伸びます。

○キャリアガイダンス報告(1年)

2月13日(水)6,7限に1年生対象のキャリアガイダンスが実施されました。この行事は朝陽同窓会のご協力を得て、各分野の第一線でご活躍の先輩方から直接お話を伺うというものです。生徒は希望の講義を二つ聞くことができます。今年は15名の諸先輩がそれぞれの仕事の魅力や進路選択の経験などをお話してくださいました。講師をご紹介します。

① 根津 昭義 氏 (19 回生)

元・NHK 交響楽団

演題「その仕事が好きで好きであることが決め手」

② 太田 公子 氏 (19 回生)

元・福島テレビ・テレビ神奈川アナウンサー

演題「なってよかった、アナウンサー」

③ 佐藤 重和 氏 (20 回生)

元・駐オーストラリア・タイ大使

演題「外交、外務省、国際関係機関について」

④ 太田 正行 氏 (23 回生)

元・新宿高校教員

演題「教師にもとめられるもの」

⑤ 酒井 邦彦 氏 (24 回生)

元・広島高検検事長

演題「法律家になって社会をよくしませんか」

⑥ 佐野 由雄 氏 (24 回生)

名古屋大学大学院経済学研究科教授

演題「グローバルに生きる、グローバルで仕事を
をする」

⑦ 篠原 厚子 氏 (25 回生)

清泉女子大学人文科学研究所教授

演題「薬剤師を目指した理由、研究職に変更し

たのは面白かったから」

⑧ 植田 益朗 氏 (26 回生)

演題「アニメプロデューサー、一度やったらやめられない」

⑨ 三矢 恵子 氏 (26 回生)

演題「メディアで何を伝えたいのか」

⑩ 関戸 由美子 氏 (30 回生)

演題「自分を育ててくれる場所」で生きる

⑪ 中越 一統 氏 (31 回生)

公認会計士、リソース・グローバル・プロフェッショナル・ジャパン(株)ディレクター

演題「公認会計士の常務について」

⑫ 細矢 剛 氏 (34 回生)

国立科学博物館 植物研究部 グループ長

演題「多様性は宝」

⑬ 本間 謙 氏 (34 回生)

JICA(独立行政法人「国際協力機構」)

派遣による専門家

演題「国際協力と異文化との闘い アフリカ勤務
14年」

⑭ 西村 雄一 氏 (43 回生)

FIFA ワールドカップレフェリー

演題「夢と感動を支えるものとして」

⑮ 原田 将史 氏 (48 回生)

1級建築士、Niji Architects 共同代表

演題「寝ても覚めても建築」

【今後の予定】

○学年末考査 3/5 火～3/8 金

○実力テスト(学び未来 PASS)

3/11 月、3/12 火

○卒業式 3/15 金

○合格速報会 3/22 金

○修了式 3/25 月

板前は教授になった

英国キングス・カレッジ・ロンドン、キングス・ビジネス・スクール教授

岡崎伸太郎 (29 回生)

大観覧車 (ルビ: ロンドン・アイ) を左にウォーター・ルー橋を渡ると、右手にサマセット・ハウスがある。この一翼がキングス・カレッジ・ロンドン (KCL) の法学部になっていて、そこからストランド通りの本部ビルへと繋がっている。ビジネス・スクールはそのストランド通りの向かい側、かつて BBC ワールドサービスが長年拠点としていたブッシュ・ハウスだ。

この大学で教鞭をとるようになってもう3年。生活の基盤はスペインだから、月曜朝9時の飛行機でマドリッドを立ち、水曜午後8時の便でロンドンから戻る。といっても大学の講義は10月から3月までなので、それ以外の月は自由にさせてもらっている。

卒業30年特集の「人生の転機」に書いたように、今から35年前、実家の料理屋を継いだ私は、狭い板場で刺身を切り、天ぷらを揚げていた。あの板前が英国の大学の教壇に立つなどと誰が想像しただろう。スペインで博士号を取得してからは死に物狂いに論文を書き続け、その成果が認められ KCL に迎えられた。

1829年にジョージ4世の命により設立された KCL は英国で4番目に古い大学。これまで12名のノーベル賞受賞者を輩出している。DNAの螺旋構造の発見で有名なロザリンド・フランクリンもここで研究に従事していた。ウォーター・ルー駅の近くには彼女とモーリス・ウィルキンスの名を配したキャンパスもある。

専門はマーケティング。特に広告に興味があり、国際文化比較やメディアに関する論文を発表してきた。これまで色々な仕事を経験したが、研究はつくづく天職だと思う。

研究生生活の「面白さ」とは何だろう。まず創造性に富む仕事内容。興味の湧くテーマを見つけたら、理論構築のために論文を読み漁り、ミステリーの謎解きのように仮説を立てる。実証調査の検証結果を論文の形にまとめ、査読審査のあるジャーナルに投稿し評価を待つ。そこで掲載されれば、世界中の読者と共通のテーマで繋がりがあえるのだ。

被引用データからは、自分の研究がどの国のどの研究者の役に立ったかすぐに知ることができる。

ジャーナルといえば、大学の研究と並行して、2014年からジャーナル・オブ・アドバタイジング (JA) のエディターを務めている。JAはアメリカ広告学会が発行する広告研究の世界最高峰。年間370本ほどの論文に目を通し、査読者を割り当て、レビューの結果によって掲載の最終判断を下す。エディターは公募。米国で面接を受けた際は審査委員たちの間で賛否両論、意見がまっぴたつに分かれた。というのも、これまでJAのエディターは代々米大の教授。非英語圏の研究者(当時はマドリッド自治大に勤務)に編集の長を任せることに一部の委員が強く反対したらしい。どの国にも排外的な保守派はいるものだ。

ジャーナルもそうだが、研究者にとって国際的ネットワークの構築は必要不可欠。そこで、英国やドイツ、オランダ、ベルギーの研究者らと2008年に欧州広告学会を設立した。共通の学術的興味というのは魔法のようなもので、学会では見知らぬ人たちとも「広告研究」という繋がりだけで長年の知己のように打ち解けられる。大会誘致のため、スロベニアやクロアチア、ノルウェーなど普段あまり馴染みのない国々を訪れることもできた。

研究生生活では後陣の育成も重要な使命。若い才能の可能性は限りなく、それを伸ばすのが指導教授の役目だ。現在、二人の院生の博士論文を指導していて、一人はレバノン、もう一人はエクアドルからの留学生。どちらも授業料全額免除の才媛だ。性別や国籍、人種、宗教、性的指向などの多様性を尊ぶ、多文化共生の環境作りが大学院でも徹底されている。

ちなみに KCL には定年制が存在しない。健康でさえいけばまだまだ研究が続けられる。好奇心満載の人生を楽しみながら、今後もさらなる高みを目指し努力していきたい。

(朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。)